

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02693

研究課題名(和文) 英語スピーチアクトコーパスの構築・拡充並びに英語教育と国際交流に於けるその活用

研究課題名(英文) The Compilation and Expansion of English Speech-acts Corpora and Their Application in English Language Teaching and International Exchanges

研究代表者

鈴木 利彦 (Suzuki, Toshihiko)

早稲田大学・商学大学院・教授

研究者番号：40433792

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：「英語スピーチアクトコーパス(SAC)」に関して、[A]-感謝、依頼、賛辞、提案、[B]-謝罪、招待、苦情、申し出、を対象とし、英国において4回のデータ収集を実施し、32の[A]記述式回答と音声データ、33の[B]記述式回答と音声データ、12組の[A]ロールプレイ・ビデオデータ、13組の[B]ロールプレイ・ビデオデータを得た。海外交流大学とSACを活用したサイバー協働学習プロジェクトを行い、アンケートの結果から、総合的に参加者が学習意義を感じたことを確認した。大学生を対象に「感謝」、「謝罪」、「依頼」、「招待」に関して大学入学前までの学習経験についてアンケート調査を実施して現状把握を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「英語スピーチアクトコーパス」の構築・拡充により、8種類の英語スピーチアクトにつきその語彙、構文、ディスコース、ポライトネスに関する方策を分析研究するためのデータが得られ、学術的にも社会的にも意義深い研究成果を上げることができた。「ICTを活用したサイバー異文化交流活動に於けるSAC活用のための教材および教授法の研究・開発」に関して実践活動を通じて意義のある実証を行うことができた。大学入学前までの学習経験についてのアンケート調査により、「日本の英語教育におけるスピーチアクトとポライトネスの取扱いの現状」につき意義のある研究を進めることができた。

研究成果の概要(英文)：For the purposes of compiling and expanding the English speech acts corpora (SAC), the researcher conducted a data collection project in the UK four times during the research period, regarding the target eight speech acts ([A] thanking, requesting, complimenting, suggesting; [B] apologising, inviting, complaining, offering). As a result, he obtained (1) 32 sets of questionnaire and audio data concerning [A], (2) 33 sets of questionnaire and audio data concerning [B], (3) 12 sets of video role-playing data concerning [A] and (4) 13 sets of video role-playing data concerning [B]. The researcher conducted a collaborative cyber learning project with a foreign university utilising the SAC, and confirmed that the participants had felt the project meaningful. The researcher also studied about the learning experience of university students about thanking, apologising, requesting and inviting, using a questionnaire.

研究分野：言語学(語用論)、英語教育学

キーワード：語用論 英語教育 異文化交流

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究代表者は、研究開始までの研究経歴において、「語用論」(Pragmatics)の研究を続けてきた。その中でも特にスピーチアクト(発話行為)とポライトネスに主眼をおいて研究を重ねてきた。その経験から、本研究が対象とする分野の重要性を強く認識していた。

(2) 近年の英語学習において「語用論的能力」(Pragmatic Competence)の育成の重要性は近年ますます強く認識され、この分野において様々な試みがなされている状況であった。「語用論的能力」は、語彙力、文法力などを土台として「文脈」における発話の意味を正しく理解し、そして自らが発話できる能力である。真の「コミュニケーション能力」育成のためには、語彙文法教育と共に、対人関係と状況に応じて適切な会話を遂行する能力が必須であるという認識が高まっていた。

(3) 「語用論」(Pragmatics)ではスピーチアクトとポライトネスが2大テーマとして取り扱われており、本研究代表者は、それまでの言語学と英語教育学研究における経験から、「日本人英語学習者が、母語(日本語)では完璧に文脈に応じてスピーチアクトとポライトネスを操れるにも関わらず、学習対象である英語ではそれらを断片的にしか、もしくは、全く操ることができない」ことを実感していた。更に、ICT (Information Communication Technology)の発達と普及により、ますます「国際コミュニケーション」が身近なものとなり、英語を共通語としてやり取りを行う場面が増えており、そのような実践的な英語使用の場面においてスピーチアクトとポライトネスを適切に使いこなす「語用論的能力」は必須であるという認識を持つに至っていた。

(4) 更に、本研究のテーマに関連して、「日本の英語教育におけるスピーチアクトとポライトネスの取扱いの現状」の把握も大切なテーマであった。

(5) 本研究代表者は、これらの背景と自身の研究経歴を踏まえて当該分野に貢献すべく、本研究を開始するに至った。

### 2. 研究の目的

(1) 言語学ならびに英語教育学における分析研究において使用できる「英語スピーチアクト・コーパス(SAC)」の構築ならびに拡充

(2) 分析研究対象の英語スピーチアクトにおける語彙、構文、ディスコースの各部門におけるストラテジーの研究、ならびにポライトネス・ストラテジーの研究

(3) 「ICT を活用したサイバー異文化交流活動に於ける SAC 活用のための教材および教授法の研究・開発」の実施

(4) 「日本の英語教育におけるスピーチアクトとポライトネスの取扱いの現状」の把握

### 3. 研究の方法

(1) 言語学ならびに英語教育学における分析研究において使用できる「英語スピーチアクト・コーパス(SAC)」の構築ならびに拡充を目的として、英国において合計4回のデータ収集活動を行った。データ収集の方法は、[A]- Thanking (感謝)、Requesting (依頼)、Complimenting (賛辞)、Suggesting (提案)、[B]- Apologising (謝罪)、Inviting (招待)、Complaining (苦情)、Offering (申し出)、の8種類のスピーチアクトを対象として、記述式回答用紙と録音機器を使用したデータ収集、ロールプレイ(2名1組の会話)のシナリオ作成とそのビデオ撮影によるデータ収集、を実施した。

(2) 分析研究対象の英語スピーチアクトにおける語彙、構文、ディスコースの各部門におけるストラテジーの研究、ならびにポライトネス・ストラテジーの研究のために、上記(1)で得られたデータをコーパスデータとしてスピーチアクトごとにまとめ、分析研究を行った。

(3) 「ICT を活用したサイバー異文化交流活動に於ける SAC 活用のための教材および教授法の研究・開発」の実施のために、台湾・元智大学(英語と日本語を外国語として学習)と早稲田大学(英語を外国語として学習)の間で、次のサイバー協同学習プロジェクトを実施した。双方が当プロジェクト用に設定された Facebook Group に参加し、Requesting (依頼)を対象とした SAC 教材をダウンロード。双方とも、本研究代表者が英国で得た Requesting のデータから抜粋して作成した Formal/Polite と Casual/Friendly に分類分けされた会話例の教材を学習。台湾の参加者は英語の会話例を中国語、更に日本語に訳し、気づいたことを記入しクラス討議。日本の参加者は英語の会話例を日本語に訳し、気づいたことを記入しクラス討議。台湾の参加者は、作成した日本語訳を Facebook Group に投稿し、日本の参加者がそれに対してコメント付けを行った。国際ビデオ会議に向けて、Formal/Polite と Casual/Friendly の2種類に設定した Requesting のシナリオ作りを行った。台湾の参加者は英語、中国語、日本語で場面設定と会

話例を作成し、気づいたことを記入しクラス討議とリハーサル。日本の参加者は英語、日本語で場面設定と会話例を作成し、気づいたことを記入しクラス討議とリハーサル。双方ともシナリオをビデオ会議用 PPT で作成し、Facebook Group で共有した。ビデオ会議を実施し、双方が PPT を用いてシナリオを実演発表した。ビデオ会議終了後に、双方が Facebook Group 上でお互いの発表についてフィードバックを付けた。当プロジェクトにつき、終了後アンケートを実施し、その結果をとりまとめた。

(4) 「日本の英語教育におけるスピーチアクトとポライトネスの取扱いの現状」につき、パイロットスタディとして、日本で英語教育を受けた 8 名の大学生 (上記(3)のプロジェクトに参加したクラスの受講生) を対象に記述式アンケートを実施し、Thanking (感謝) Apologising (謝罪) Requesting (依頼) Inviting (招待) に関して大学入学前まで (小・中・高) の学習経験について調査し、現状把握を行った。

#### 4. 研究成果

(1) 「英語スピーチアクト・コーパス(SAC)」の構築ならびに拡充につき、合計 4 回の英国における調査で、[A]- Thanking (感謝)、Requesting (依頼)、Complimenting (賛辞)、Suggesting (提案)、[B]- Apologising (謝罪)、Inviting (招待)、Complaining (苦情)、Offering (申し出)、の 8 種類のスピーチアクトに関して、32 の[A]記述式回答と音声データ、33 の[B]記述式回答と音声データ、12 組の[A]ロールプレイ・ビデオデータ、13 組の[B]ロールプレイ・ビデオデータを得た。記述式回答用紙は、各対象スピーチアクトについて Formal/Polite と Casual/Friendly のそれぞれのポライトネス・レベルでの場面設定と発話を求め、それらの発話にそれぞれ Positive reply と Negative reply をつけてもらい、それぞれの発話につき Notable linguistic features (目立った言語的特徴) を記してもらった。これらの設定により、「異なったポライトネス・レベル」でのスピーチアクト遂行のためのストラテジー (語彙、文法、ディスコース) と音声的特徴、スピーチアクトに対する肯定的並びに否定的な応答のためのストラテジーと音声的特徴、回答者が考える「言語的特徴」について分析研究を行うことを可能にするデータを得ることができた。データは収集後にデジタル化を行い、8 種類の英語スピーチアクトとその応答、また回答者が考える「言語的特徴」に関して量的・質的研究を行えるようデータ整備を進めた。

(2) 「英語スピーチアクト・コーパス(SAC)」につき、研究分担者と共同研究を行い、以下の内容について共同発表を行った。

「Rapport Management in Apologizing: From English Speech Acts Corpora」: 本研究期間中に得られた SAC データの中から Apologising (謝罪) に焦点を当て、rapport management (Spencer-Oatey, 2008) の観点から分析を行った。第一の研究結果として、10 名の研究参加者から提供された謝罪のスピーチアクトにおいて rapport management の構成要素である sociality rights and obligations (社会性における権利と義務) が管理(manage)されていたことが挙げられる。すなわち、車をバックさせて相手の車にぶつけてしまったり、相手の E メールを誤って削除してしまったりして、sociality rights and obligations の内の equity rights (公平・公正における権利) を侵害してしまった場合に apologise (謝罪) を行っているということである。第二の研究成果は、応答が positive でも negative でもどちらも自由に選択できたロールプレイにおいて、apology の受け手が positive な応答をする傾向にあり、謝罪した人の「フェイス」(面子)を保つために apology を受け入れることによってポライトネス・ストラテジーを用いていたことである。その一方で、記述回答用紙の回答者たちは negative な応答をする際にインポライトネス・ストラテジーを用いていた。これは、彼らが apology に応答する際に必ずしも融和的な関係や、ラポールを維持する方向性を保ちたいという願望を持つとは限らないことを意味していることが判明した。

「A Study of the Speech Event of 'Offering' in English from the Viewpoint of Politeness」: 本研究期間中に得られた SAC データの中から Offering (申し出) に焦点を当て、Leech (2014) と Spencer-Oatey (2008) の理論枠組みからこのスピーチアクトで見られるポライトネス・ストラテジーの方向性について研究結果を発表したものである。Offering では、主に Leech の Tact Maxim (思慮の根本原理) に属するストラテジーが見受けられ、それは“Would you like ...?”のような「疑問形」に代表されている。本研究のデータでは“Take a seat, I insist!”のような「命令形」の例もあり、それらは Leech の Generosity Maxim (寛大さの根本原理) に一致していることが判明した。これらの研究成果は Leech の「Offering は 2 つのポライトネスの方向性を持っている」という主張を確認するものであった。また、Spencer-Oatey の理論枠組みを用いて、「疑問形」がなぜある文脈において適切であると認識されるかが説明できることが分かった。「疑問形」の offer は受け手の equity rights (公平・公正における権利) に対応していると考えられ、「命令形」の offer は受け手の association rights (繋がりにおける権利) に対応していると考えられる。Offer を行う側は「疑問形」を選択することによって受け手の association rights よりも equity rights に重点を置いているわけである。さらに言えば、「疑問形」は offer を受け入れ

ることに対する乗り気のなさに対する自由裁量を受け手に与え、彼らの自主性を保証するのである。このように Spencer-Oatey の rapport management のモデルは Leech のポライトネス理論に対して効果的な補完的理論枠組みを与えることが確認された。

(3) 「ICT を活用したサイバー異文化交流活動に於ける SAC 活用のための教材および教授法の研究・開発」において実施された学習プロジェクトにおいて終了後アンケートを実施し、台湾・元智大学 26 名、早稲田大学 17 名、合計 43 名から回答を得た。アンケートの質問項目と結果は次の通りである。【<Part A (5= Very beneficial, 4= Beneficial, 3= Acceptable, 2= Not so satisfying, 1= Dissatisfying): [A-1]プロジェクト全体を評価してください(3.93)、[A-2]英語スピーチアクト・コーパスからのサンプルは有用でしたか(4.00)、[A-3]翻訳活動は有用でしたか(4.14)、[A-4]Facebook 活動は有用でしたか(3.51)、[A-5]ビデオ会議活動は有用でしたか(4.03)> <Part B (4= A lot, 3= A little, 2= Not so much, 1= Not at all): [B-6]英語での Requesting についてどれだけ気づき、学習しましたか(3.16)、[B-7]中国語での Requesting についてどれだけ気づき、学習しましたか(元智のみ)(2.92)、[B-8]日本語での Requesting についてどれだけ気づき、学習しましたか(3.33)>】総合的にみて、参加者が学習の意義を感じることができるプロジェクトを運営できたと判断できる一方で、いくつかの点において実施方法・内容について改善の余地があることが判明した。例えば[B-7]では、「自分はプロジェクトの前からすでに中国語を知っているので、私たちは中国語の Requesting について学ぶ必要はない」という意見が寄せられた。英語の会話例を母国語に訳す作業は「語用論的意識」(Pragmatic Awareness)を高め、ポライトネスの特性について学習を促すことを意図したものであったが、結果の数値とこのような意見から、ワークシートを工夫してプロジェクト運営者の意図がより強く感じられまたそれに沿ってより効果を感じながら学習できるような設定にすべきであることが理解できた。

(4) 「日本の英語教育におけるスピーチアクトとポライトネスの取扱いの現状」につき、パイロットスタディとして、日本で英語教育を受けた 8 名の大学生(上記(3)のプロジェクトに参加したクラスの受講生)を対象に実施した記述式アンケートにおいて、全ての段階(小・中・高)において「ない」と回答した回答者が 3 名いたのに対して、全ての段階において「あり」と回答した回答者は 1 名であった。「あり」の場合で学んだ表現としては、【Thanking (感謝) = Thank you / thank you for good presentation、Apologising (謝罪) = I'm sorry / hey mam, I'm sorry. Because...、Requesting (依頼) = Please 命令形 / Can/could you / 助動詞の例文、Inviting (招待) = Let's / Why don't you / 助動詞の例文】が挙げられた。自由記述では、次のような指摘がなされた(抜粋)。「以前の学習では、限られた典型的な表現しか学んでこなかった」、「大学入学以前は、自分が学んでいることがスピーチアクト、ポライトネスストラテジーだという自覚はなかったが、今思えばそれを学んでいた。たとえ文法に長けていても、スピーチアクト、ポライトネスストラテジーを知らなければ本当の意味でのコミュニケーションを取れないと思うから、この授業は必要であると思う。」「このような学習を大学入学以前から出来るようもっと日本でも英語学習においてスピーキングに力を入れて欲しい。」「実際にニュアンス等を学べる機会は大切にしたい。もっと早くから学べる機会があってもいいと思った。」「高校になると受験勉強という目標があり受験で使う英語表現を学ぶことが多く自然なポライトネスを学ぶ面は小学校、中学校に比べて多くなかったと思います。」「一通り目を通して、新しい表現を学びました。」「改まって表現を学ぶ機会はなかったように感じる。もしかしたら習っていたかもしれないが体系的に学んだのはこの授業が初めてだった。実際にニュアンス等を学べる機会は大切にしたい。もっと早くから学べる機会があってもいいと思った。」「学習する機会がなかった。公立の学校だと教科書どおりにしか英語の学習をする機会がなく今回の英語スピーチアクトとポライトネスのように状況ごとに使い分けるような学習はできなかった。受験でも今回の授業のような会話表現は勉強していなかった。」

#### <引用文献>

Leech, G. N. 2014. The pragmatics of politeness. Oxford/New York: Oxford University Press.

Spencer-Oatey, H. 2008. Face, (Im)politeness and Rapport. In H. Spencer-Oatey (Ed.), Culturally speaking: Culture, communication and politeness theory (2nd ed., pp.11-47). London/New York: Continuum.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Toshihiko SUZUKI and Ami SATO	4. 巻 -
2. 論文標題 Rapport Management in Apologizing: From English Speech Acts Corpora	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 21st Conference of the Pragmatics Society of Japan	6. 最初と最後の頁 p.169 - 176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 SUZUKI, Toshihiko & SATO, Ami
2. 発表標題 Rapport Management in Apologizing: From English Speech Acts Corpora
3. 学会等名 日本語用論学会第21 回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 SUZUKI, Toshihiko & SATO, Ami
2. 発表標題 A Study of the Speech Event of 'Offering' in English from the Viewpoint of Politeness
3. 学会等名 日本語用論学会第22 回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 亜美  (Sato Ami)  (20823280)	名古屋商科大学・国際学部・専任講師    (33914)	